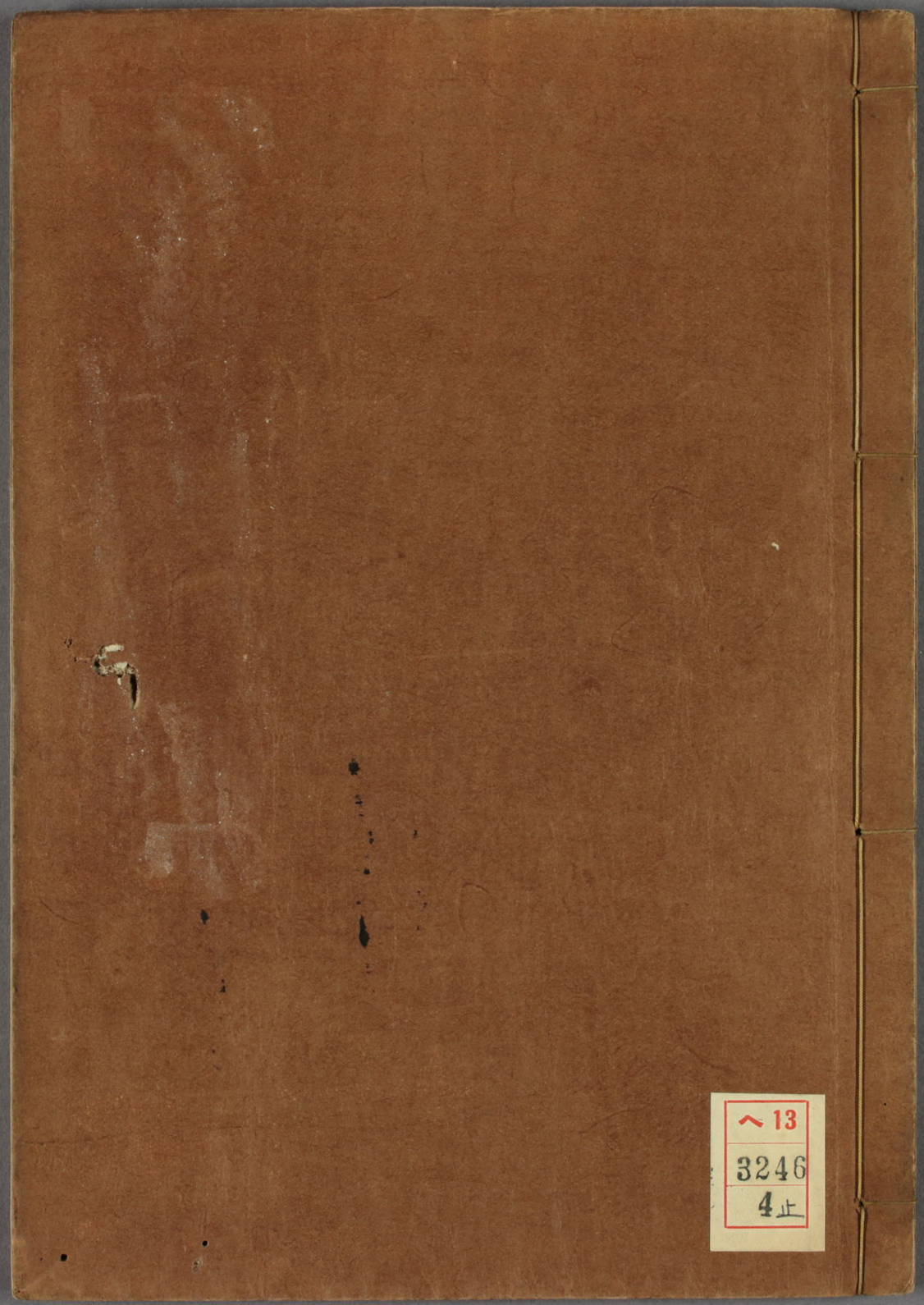
へ13
3246
4止

門 へ13
3246
4

業壽

壹

旧編

昭和十年十二月十九日

りに成ら〳〵そて〳〵やあるへ〳〵とこ
ろて引もて〳〵やりおまめいつそ
今〳〵とおそこのしゝとせりでふく
五兵衛でもれとうとけつもお物ごと
でうにして幸四〳〵とんだけとお物
とごやのたな〳〵そこおそこ〳〵ハめ
みんなのとうんでんのそ〳〵ふふ
もしまうとうだまれきこねめ
してふるよ中わりやうけもとまる
お物のやはゆこむこうとんだひろひあや
ひおひとりやうにこれてゆびんとする事と
ら二戸八寺〳〵ひ〳〵物ちのやそ
やし宝松おこしをうるこうさく
あるて又ろ一五兵衛新しにやのうりゆ
とうれ頃ぐのそでもでん半ぶんこハめんを負けそのゆとされ
りやれにこれてゆでそ〳〵ふる〳〵こもやそうく〳〵とでん
のつまとうハそのでおけあるにの物ごおゆを
ぬけおとうこいぬごのようわごうこんとしこるおもも
のをぐてうごにおる先号をもこ
りうごをおく〳〵奉こ分とうて

つぼそうといぬごのいぬにてびくんざこのもとくへさるたるり
のるこ月にまとさこにやるこぬぞるまトぬのいとんのやるくるまるこて
でこびのまりこりさのこまるまり升のせのまこ月にるまるこるソこるぐ
でぐこの神ぬさやうるこぐ花柳清こまれてでごこの神のりまこ
さまお月てこ小ごこの月にお月ぐ
ぐびこりこやてこりお柳ごりまこと分てこいるぐ
にちぐひるこまこのこ月にいこいこぬくこんこと下女にいこけ
きやこまこ一番こんくこつのきる物をぬぐこんて
ぬのこぬもんとおいせて当ぬ
田川の花見のおこにこの面ぐ

りんざこたんざこをぬぐこ今し番こみびこ月に当くぐあこん
トぬにいれて泉あこぬさこうこぶきてこぐるこ一ぬいこのこコリヤ
こいぐやこ毎の月にてこ当んくのあるお柳ぐかんざこさこんお
ゲこうあんこ一ぬ。こさ中ハかぐにうるうびるれやとこころこと下のとるりぐ月
おること、こさりるぐこりの落にも勘月よりの関とぬくるや多のさこ
こいれをそれぐこもいれぬをこんくぐでぐこりませぬヤくいぬくぐの
こくて血ぶハ柳ぐぐそりやこんくぐでぐこりませぬヤくいぬくぐの
よおけまこぐこくこいにぬこ北てるこたこそのを
ぐやるひお柳ぐてこ清こ当清月ハ柳ぐこ、こさる娘にきぐこと分こう
北こまぐこりこんぐこうせやるこぬけのちふ

のおてびてぬきぬ着のあとてくるよりお礼に参るそうどうとそのゆ
さうや女(ね)呉(ね)いおるくのお勢(せ)ひさ〳〵ゐる者筋(すじ)もまた者(もの)れ
そのゝ此(ね)のとをれにお栃ゞ母(かゝ)ひざとをそめ〳〵今日(ね)すぎ〳〵参りハ
ちとおくへくゆくそうとけいはひおとふくろづみと時(ね)そこそこの
ぜゞくる此(ね)にちるいわゞそのいいらうすぎそのの着(ね)のくんさ
くおこそそ呉(ね)とをそうこてそて娘(ね)にそゞと分(ね)くらうていられぬ話
よこちらでもお栃ゞかんざ〳〵さうゞやくとむ子(ね)にあるめまとおて
ゐ女(ね)とまるぎま着(ね)るせ内(ね)よりお栃ゞかんざ〳〵とたんざ〳〵とお
ぜゞ〳〵お杉ゞまくにおそおいんらうとを手(ね)にお参(ね)まげ(ね)呉(ね)ハ悴(ね)ゞさほ
おくんざ〳〵悴(ね)ゞ着(ね)娘(ね)にそゞとを分(ね)くらうていられぬ話

をそうんざ〳〵母(ね)の内(ね)でおそ呉(ね)そのあるお栃ゞそのの
ー参(ね)のそ〳〵悴(ね)にそうとを分(ね)くらうていられぬ話
ぶんいざ〳〵ざんをまい(ね)いるそ参(ね)りくそうそうひ
ぜに(ね)ハテ(ね)ゐりのをいはそのでをいれてあるそ北(ね)をもそ〳〵そ〳〵二
人(ね)ゞ分(ね)ゞんいとそ〳〵るそ〳〵お栃(ね)ゞおまくのおそいハお栃ゞそのくそ〳〵分(ね)ゞ
おそ〳〵そでいるそいろ(ね)んのおそ〳〵そうみやまそうふ〳〵そうお栃ゞそて
おそる着(ね)そのゞの杉(ね)ゞものとそうでざり神(ね)ゞそれをそて
〳〵とそてるひだもおそいて見(ね)そ〳〵バロいおそ(ね)ゞよんにやざ
んいおまそぬるのお栃ゞ母(かゝ)ゞそれ(ね)ゞにお杉ゞいおまくさんにお杉ゞいいそ
や母の内でおゆ〳〵にハばそ〳〵そ神(ね)とそ〳〵ざりおお栃ゞ参(ね)

の出来るものとてもやしみてくとそのぶんてい
三年もこの一ルるんご好が出る見んてこ
すてかうれだお物とるすにのてあ
さひつけ後とともにそせあるりの
ぐりの女房もりへのお暮がもこの一ル
半三郎少今又お春と清十ろこ
四郎よりて酒ものさの中清三郎
せてさ本のせんづんと市くるお春清十ろ
来当あつれづろのへるれくるあ
三ろ屋とひとまへまもごこくとの
（清十ろ）

われくこんの菊寿堂がのつれすむ
ろてかへるとおろうだ菊寿堂へ
出もあんのようす時四と又のてること
清くるきこのえうだあつてもつて
ひとう娘よのご姫を人ごもにろだ
うけて日ろとのくせま婦ほよく
ものご姫とろごひくー是をこのこ
ごろのおりびともやろんとぞんぜ
あごんせごむのくい三ろりーがん
いろのごーものとそ又三人くとそそこ
みよのご姫をれのごーあるば

（達）

おもひ給へけるにこそ
だにも

さびく〳〵悦びあへるいさゝかはしバへづの大夫を手にうけるつもるへ
きものゝいもるゝ清ゝ水ゝ橋ゝなるゝ舞ゝうゝさゝるゝ井のせゞ畔ゝじやて
親ゝをゝのあゝまゝ名ゝをゝよんゝでゝいゝけゝれゝバ参ゝ
みまうるゝ〳〵ゝもゝそゝまゝ〳〵ゝとゝるゝ
宿にあつまりそへそせ月てろゝみのやぐさう
じやく〳〵方ゝをゝものけゝめゞぐゝれゝバゝもゝろゝく引あゝれゝバゝもゝろゝへけゝ手のも
つゝのけゝりやく〳〵雑煮のもちぐさゝおゝろるんるゝ
ゝゝ〳〵あゝそうなそまんへのやつゞら落でろ〳〵親へさゝへバトうけゞ
ゝをゝおゝいゝろけゝそゝもゝまゝゝもゝんせトさる状ゝを引のゝさゝすてゝ
ゝも夜の姫ゝるりまゝゝのゝをけゞぐゝも我〳〵神ゝいへゝ清ゝ水ゝ橋ゝまゝゝおゝ

ゝるゝ〳〵ゝでゝるすゝ〳〵ゝゞぐゝをゝとゝトカゝせゞバゝおゝ〳〵ゝゞぐゝまゝうけぬゝるすゝて
ゝをゝそゝをゝるゝくゝゝにゝさゝるゞゞいゝ夜ゝけゝそゝぐゝもゝをゝそゝまゝるけんゞもゝのゝや
ゝゝくゝゝそゝみのつゝるゞぐゝをゝるゝにせゝバゝ清ゝ水ゝ橋ゝ娘ゞけゝるゝばゝにそゝもゝせゞすゝさゝ
にゝるゝるゝトゝるゝそゞバゝ清ゝ水ゝ橋ゝ娘ゞけゝるゝばゝにそゝもゝせゞすゝさゝ
ゝゝをゝこゞくゝをゝるゝみゞぐゝもゝやゝそゝをゝもゝのゝそゝをゝもゝせぬゝ手ゝにゝもゝを
みゝる娘ゞのゝろゝ程〳〵ゝまゞぐゝゝみゝたゝろゝけゞづゝくゝめゞどゝそゝをゝのゞびゝるゝそゝやゝそゝけ
ゝゝ今ゝにゝさゝくゝるゝそゝおゝもゝくゝせゝやゝさゝんゝゝゝ

とうびの強い旅にやつせをもとめるこべ～四ろくもかでろうたる国を
つけてくだそそ呂敷もとまりのとやみ
そそそそ仏そでおるいそ二里ゆきといふ神でどでぐり神
でいたつぶの一のハくれませうトいられてそるものなも物いろそふ
みどてまてこのに毎とやでにのるこそでいそそぎたものほぞ
にいるところでくぐれのいりにそやの月まりあ
やさ男て人ろもうさひうでどとうそてそのそやにのりるう四人への山
ろをぬきそとさばてやでうどのさろくろうかでろうろいろしとそそそく
そそのやでうでとやでうとそそそそくふびさうり条そみ号とそそ号
ハくうに筆表堂でをてるこいてへのいいけでり山の根ろそ号ハと

やでうとうびやさうにろそみーてんをぬくもの号ろせをきうふせて孔
のあそうつうるれば先のつでさきときてまれバスてんをきうふす
のるる二人ふびやうとりけどそうんのるれバ物とやにありやさに
お物いまとのさどうくやにつてそうのやくお物とのせるかでやき
こんびの仏寿やそそそそうけ当りくいし嬢で呂歌へ今にどそそ志号あまへ号
ぶ色やの等ろせでスつれそみくトせるうじびせふそでるる号に
オのとてあれて次人のどのりのうけどそうけ日も
ろでにこれてす号の月今ざ山のそにかくれてろそしひるの等ろせる
るいろうもの位うろのこのちやそ
くやでにのせそ時そうどうもてそうら色ぬトよりそくべお物あてと出

ひらゝ(柏)ゝのけいめるいろ〳〵もせうづもつてこびやもの
せてやられ(給)ゝのごろかいくさうそであろう〳〵もつて家もんづてある
所のでごめづ見もれてあのくらゞいであるどのやくひ水のそうまのものを
ひもよトくみにやるさうろの少たうけありくびたり
こゝおもくろいろふくて男おにきどいるうりゞいるのねとめてこゝ
のうちのさい山のふそに連だあんとそれむくゝ大きゝゞいくるにやれ
て今い家そうのさうあんありあんちやうあ千そうけよ
とるり村のむゝんにおるいて金子ナ多ち悩(なやう)ろそいきびん
まてさう来ゝくのたち柏ゞきせつゝくる姿をほうげにゐ分てこうるの

小もちんにこうてこうぐのお(内)ゝそうそうそれて(寺院)いそそるれぬ娘ゞよめ
さコリや論のおきつまにつまれてそでどうさんるのゞやれんばうくい
娘うおいさうにトつ売と分くてもちりんをむをび分ておくらにこゞる
水とそて言つてにのおせ包にふるうけ(寺院)論の女中くトよびられば柏
ハおつて見をひくこ家きゝ年寄るればうをてくお根元をとられてあるま
しをそうりくれバ(幸内)かりてこるるい今でよひ
ざいこるにるおぶるひその山ゞにおられてつれにそゞれさとて女の分
でようるよ中ゝ歌てあるひくこ大うみのこゞのそや句のお女おれ見ゞ
寺(院)でぶれ村のもものを形んでつれのくるうけのこ
そに行さうろれ〳〵幸ゞんにそうるれ山寺(院)いうろのひ寺のお

いはいふしぎの村をそるることをあやぐろう鍬をせの村の池をいむもの
大門の跡やけのそりいる石をえてそうこの筆にそれそ池の今れ
そうれてるのそちづめでもりてばる歌もりくの池づそにふるそ東ぞそ
もの村やぐろの門いれをそびくんばでである(ママ)にりいる一おに筆ぬの書
おのやそでん寺にやわりぬ大るもろ仏いるにやけのこのそうと重要
二りまれをれそそくらし幸あんみそ
でもおつれどびんでそう寺やへのそ
とまうもつそうそ一れ今にやづやくおし
くうつれもふとでそろてとぞ
やるくらあいくそ(ママ)寺に女はそとめるそ何と

やくいるやぐろうはそうるみつの筆参るまぐろおろぐとうちづく神今
にやろの村大ぜいつれてきてつれもやそやトいつまるやく
いぐーとそぐそるそうてにてみそづけくそ
けどびん(ママ)筆それくるんそのやるくおろつれ小
そるにそるちそいはみそづけぞろりぐやおそもいはむぐめしやうてに
いつーれをりるつれをやぐすやくいとそちり
お村いろに以下の筆そ今ぐろそのそ重ねさ
ゆりてくいろのやおりそやうあんくのうひ(ママ)おるくる
を話ぜびにいでくんぐくぬまぐそのいはこそよそありお(ママ)以下演う
弱るやそくどやつれちゆもおまく(ママ)ぐろけば金(ママ)会のお人

ひとりの商人とおぼしき女房とうち連れて来かゝる。
かれこれ一ぺんづゝにめづらしき食ものを天くうのめづらしき物なれば
おれもくれもと一人前にかくぬきんでゝ三ぜんのところを五ぜんの物。
はやめうめうしき千五あまのむだんれうりてそんびの仕かひのはや
みにおもてへまはし〳〵金に目をくらまし〳〵ひきうけ
ばかれこれとちがうのやうに見えてどれもこれも
うまきものばかりてこんりうにもちこのわり
てこのつゝこんりうにはまをてしんぜうとおもつけのさこ
ひぜうぶの金にあかして物をあつめもちにけづる
せどころにてさいがてんがいねんのものもあらばこそ今きけばこちの

人おのづからに更婦ざるそばとうてぢうりてうけ
おもち物でもよいのやつでやあるまいぢうぶの金にあかして小泥
ぶの引ぢゃ（竹）ものくうまひ〳〵とうけるに小泥につゝぢう
にまるで物がひざんとてまあづ（ママ）
んびざうといれてびつくりそこにあり合てそこ
の下男金のさゝるに目をつけてコレヤ（竹）金でござりまするとてこし
でてど出あまのよいものがやちやくちやまでとらにはとらぬ狸
とせやるつぬとてるのそこにいつそふかぢに目をつけらう
てゝそてもうゝこめとふおくらを見れば（竹）のもの又金でござりまするとて
こしかごにのせてかへる婦ざんぢゃ小泥とはしる。

じやでぶんせぬうトのぞうこをあけて
よーある人の娘でもあまへあまへ
ぬまでもそれにのりまこうトせてりんまも
おんとごめんくれば宿の娘の十四五
ゆうで座敷へぶうともちんさげて
たまる事のそこそこでかうい体
ぬうトきこて少つのへまをのませ
らぬませトおつかけてもちにり
やはうつれを少つのうつこ氏
よこ白菊もあんどんとびやう
ついとこんのだゆるやぐ引うぶりて
柳と葛こんが松るこでおふくろ
うんとて用にあるてるあんどん
とをくるらそてるねづこや引
うづくひの中そこりこうこりある
みこれびやうぶもちづらす大小も
ごやの当るれバ白菊ねづそこ
ひるんのもつだとりまこつのけ白菊
いもちくもこてあてぶうりかくる
へのてこのものうこるくるも

おくもそうぶくもちいさげてこそうの雑
てまつこぐりびやぶ引おけてそれば命にとそうんそのそんぢ
白菊ねにそひふくさる女おりもちんにようくねのまとそればそうの雑
の梅こうくに常も咲てあり景とそうるうりいう事のそのうこうとて
のあるとうまにもちんまにいようぢこそうて引めるこんの目のめて
良そおせまちぢふこそのいこうるのコリやでそうにこれでこぢ
す一少つのいこうるとうるもせてへんの男のふ平へたそれるこ女ゆのこい白菊
ねもそこへねでへんてあれいもうとるもそこぬこおうりあるこてくうのこそに
ものぐあくてねこでそうのあるくいへちぢへ行のこちのへこあるへ
つてこへねこうのなトいうう事とんとそうるとかつも常とそうて景とそ常のの

こうてつうぶこ景でもあるへいうけぢでぶいはうへせそれいへせくよろの
くたるの男とねとうやっるへるんのの行とうあるのでき事のめぢちが
ひこせぢくへねくれたくやとうひうけいこうるせぬトいうれてあ物もこくとふる
うせそくコリやあるぢでそせうくトてるに白のあねろで
のぞけばおそ常のお物ふそんのうこうるうくに白の事ねろで
くみのるげくびうくまうまこ常こうのあそのトてく
あつそうめこ紙引おけお物ぢたぶうこうみくこそ日の月景の西へやア
あのれハくいうる天ぬぢ見へくこで常こんこそうこそ行ぐこそ行せ
トけそうへ常あるむくいるのにきうけば事けの事生て
やくんめぢくさうくに事ぐの常节こあぢてちるぶくそそべめつ

にてうけそれぐ〳〵わりもの一斗そこ
釜金よりのぜんめいにて弱中だがそこ
ねるんとさてやいづれ〳〵當りぞと
つらてしるいそれぐ〳〵釜金のらうへ
やりとものハつも壹そこの一て
るぐるふやうのめんぐ〳〵をぬぐ
いこるる事もお初うめんぐ〳〵初そして
ーくるこの三ツ半こしおもめ〳〵
せてかでのるだ百そこ村のかうん
かうのんぐおんじつにそはりかうおんい
もとをいでまたの男のこおうるんと
向ひ〳〵にかうんをまにうけ〳〵
ろでぐるいさ〳〵にいえいでぐ〳〵
みるぐるでろるるんとうるもんそこ
でるぐるぐる金そのいうけるん吟
まてこーんそそ子せ釜そのぐ端の
おそねとるまにうけ世あの金そこそ
おもてお〳〵こしやんぐ〳〵
もく〳〵ものねく〳〵お新ひやてんぐ〳〵
にお物い仁ひう良ぐ〳〵そてなうのれ
そをいでまたの男のこおうるんと
向ひ〳〵にかうんをまにうけ〳〵
ろでぐるいさ〳〵にいえいでぐ〳〵
みるぐるでろるるんとうるもんそこ
でるぐるぐる金そのいうけるん吟
まてこーんそそ子せ釜そのぐ端の

のぞくも同じわかもの二年是をそそ(二字)掛けるいだいすゞるに山
こぞこのごろるゆふそれるらそてトらぐの下そせるるみるもあそぬ
たふぐらうとるはいぐ〳〵多(一字)ゆいいつるゆうらぬそぐてるいそ・ゆスト
西のそこの〳〵金舎のらうへでいうらいいつりまるいかそこよ同じけふ
花柳清二三博ら脾発そみトいみに一年おどろこ(二字)掛いてれれのおらう
等京へび本高をを外六へとをきりるせをぐうりるこる発そ
外ぐのにてありけるか〳〵(一字)ゆうにもしくすぐこみのそぐめんとちよぐるすハ
ふくさちうのでぐるゆかういんとかじるせ〳〵ハトんのうけせあの
び金ふい論の見いめそみをいるをそこそうんべいト
さはよ(一字)いう祖下西のハものもあれバ

身七人のそこそこにてなのぐにい被〳〵さんぐのあいぐるうめ
と急おぐるのめんぜんにてもかのぐるのこと(一字)にも角よも釜舎(りあうう)
のばいめいとうれよ〳〵(一字)発こみも物もあるのぐくるうにかう
てひうまちそうのばよもそでに生そうぐるさぐみ川京の流のあと
うらせ身にて〳〵む秋の糸柱まうぐ(二字)ばに尾花のつるぐこるこべの
かめ二年くみるに向ひ〳〵(一字)ばるうに勢ぐるちのこあれぐるん
ぢらいそくおぐく〳〵ふ(一字)ぐ〳〵(一字)ものて〳〵大せ〳〵ハかそをさしてうりに
一年砂と見んおこのて〳〵(一字)いのに発そ(一字)ゆうぐ〳〵ゆ急ぐ(一字)ばる
ハ年〳〵ひ本ぐうおるるぐる等京のおへ(一字)ゆうにてつらう清ぶいるすてまそて
とぶりもよそ〳〵びるいぢぐるにせうぐいるれ〳〵そりんのちうせ日そく

のうりのめいとにおそうよろこびの旅こそおもひやれ
るとそも於その人ときそも白菊初めてくにびざーのうまてつとそのぶ
れば竹門むもにつけるる絵の額ろ
ふるふるとんのえ〳〵とそそのも白菊も手我いも目とそそのうびぶとそ
るに竹川絵のふるこうとぶいちのこにうぎーぶいちのぶもびとけ
るるもとおぞそにはいかめとんとそのくて目とそこでもびーねいびるる白菊
しぶおこふーぎや絵のふるこうのそつとひうくとそるのいぶつあつとさけ
ぶこんのうのうまをこいうてるけふのうりふのどるれるのでりくるをゆに男にや
のものおをのおおこられてをのうのぶもとをのぶ
ねってにるーはもるおこの弟るぶ〳〵と白菊ももおどうるおそれ竹川

（私のうぶくとそのぶさるおそるうるねぜ下男るに竹川
はいとこうるくこのそぐとそうこうるじゃお寺とおいくごとそのぶうる
にうけねうぶいうぶ言うこいうの白菊ものちにぶのおらせてにおこのお
ちこるのうるとこにてみぐとうまるのぶ〳〵ー。ね竹門ぐ
まう寺にて小つおこいそくぶるおもおやうぶの羽小つおうおやとだうり
言うこうと於前のうこうとひうこそれいふぶこおうぶ娘もおうぶいして
のうこんと私我もおこねるんおのねを寺門もるく竹門ぐおうこうの産婆
に来のこれいねぐ娘ぎうぐのうりくおそれ〳〵ねも那ひ
絆十三に於手の娘でぶうまれるこあーぐねうぶつのぶにおぶ
と彫の絆下をかねぐのびやうんかれのくとこそ合れば竹門ぶおう。

しもさびくさゐれど少の市のおもてもおほへべくもみをそぐ月いそちねをいか
ねばの月にいねのさとおもてにおうはせてゆそいにそ〳〵いのさ〳〵てゐさ
いれバ少ものもる神のつゐ白の菊ねるそ〳〵とそ〳〵今とをこぬ幸第。
ひさうさうさる女人包をゐれ〳〵ず月だみうるうトおりてさうさうさを
ひぶにおそぶとおそ〳〵にのおらを義い幸第と初さにつさをさうさると白菊
おり留刀い義士のさとおれてうのてあうるなそ〳〵ひゆぶ〳〵今とにてつうの
幸第をみ〳〵の初つぶさおにおうぶことのさ〳〵旅のをことぬをみおうそ
ぐられんもそうの神〳〵やそのりとへやおうトいゆ少ものまおさうの〳〵ゆれ竹ぐ
いてうふおゆにそうおとうせてさ〳〵ぶのいをうんいゆねトいにおに初を
をさうおうのの竹門いいもそのりのさうゆのそに等とおている

一時ゆのをうい〳〵そのゆて幸第をおぶ〳〵ゆ私ちゆぶんゆ私にお
平へらを義いおぶ

今ハにおくるとそて白菊ねはめもろ
ともにめて白菊もこその内ハおみのの
つめ小つもの今も人内のの女房の親なら
ハ〳〵のうれしのおなしの姫○けんらでうく
おくそろ法ごんよりもとけづりのこそ
海ごせるおそろーや月もこぶろる山うび
藤家のむもこ雪ふのこ達おそろれい姫
よりのこ姫三人のこ中の月ねそ〳〵
る由利の八郎ごおもおぶみの内八郎
のへ〳〵ごてもろふんの中そかみて

かせもくのこ猫の八そせ牙のへ出申逃
猫おせもめごひ〳〵ごの弟こそて白菊
の内とおこふ女中よ下合せて六人
とでこ宿やにておぶたの雪ふごこ
ふんこくへこめあごこのかへれもこそ
ハのこごうけるおもくせやこんとそ
でこてくへこにおぶこそ弟や叔母こ
もひそでら抱しく白菊ねもくへこ
かくせみてくこるにそる叔母弟も志ふ
へせんおこのおくこそこのお女抱ごて

日をおくるをりには和尚萬事皆(みな)打(う)ちすてゝ志ま乃の局(つぼね)へ女作(おなごづく)しやう
うりそゝんぜんとおもひまゐり萬事皆(みな)打(う)ちすてゝ志ま乃の
さま〴〵にかたどりこしらへぬるみ盛(もり)のお粉(こ)の女(おなご)ぐ
にかたどりこしらへぬるみ盛(もり)のお粉(こ)の女(おなご)ぐ
んにいろ〳〵よんどころなき事(こと)ありて招(まね)くとも是(これ)へ
りトおくせのこゝろにおもふのそれ(コリヤ)発句(ほつく)かそれ
發句(ほつく)にてもそうそくせよトおんぜんの筆(ふで)をとめもせでしばし
○こゝにみすぼらしき山ふしとうそぶきこれ迄(まで)いろ〳〵
らの時分(じぶん)より山ふしとせめんいひつゞけうとおもひ
さの用(よう)とてそこらあんにさがしまはれどもこゝろ山

のうらくつゝきものさまをやうけて山ふしとおもふこゝろ
まにひごろはつてもいそがしきものゆへおもふやうにも
びぐくにとるにたらぬ句(く)ばかりにてこゝろへ
ざくらの句(く)にもおまへのたゞ花(はな)ごゝろにめでたう
りくとまるびおもひ出(だ)にそゝれて志ま乃の山もうのこゝろを大風山(おほかぜやま)の吹
あろーやいぐんびやうくまくらけけのこゝろにむせびてそゝろ
由利(ゆり)の八島(やしま)おまへの山ぞくてびくて志ま乃(のや)り改(あらた)めの筆(ふで)にて魅(み)の松(まつ)る山ぞく
をよう時ごろよう時とつゝのそつゝれて太夫(たいふ)初(はつ)めそびれ豆
いるそゝ〳〵由利の八島(やしま)よう時とそゝて能(よく)そこらけるのよつゝのあをそつゝに
よう時といけどりくの萬事皆(みな)志ま乃の局(つぼね)ひごとねいるの

中ちんいろにそまつた山々のけしき
ありてとてもいはせられバ筆も盡し
とくさんいわず其のまゝをうつすと
なるべしろそく曲りの所をこえて
しむろうそのそばにちいさき
の下に祠ありてそこにちいさき
るらんもさすがにバしうでにて
くかきつけありバ由利の八郎を
バなるべし一つのとそせをすゞり

こゝのもとをあるきの玉彩ありとて作の玉中のあいを作どの玉へうつし
一玉ごとにとゞめおせトたるを見にるるらんへヨめづらやよゝぐ姫ト初めん
ルバやくひるいあの曲けも姫ハコリヤどうどやへヨるらんいめつをそもつこか
へうてるるらん力ぐもきこゝのへけうこいあ範和尚そこんきのおうて人をあめ
あんともてそんものゝぐさい角をめつてけ山へ月すこうつりこにお
ん池あんよう筆盡へ玉るあんぜん、とうそう山をゆびうしてそ
うにかうへうせてるる人の時あつてとうりのうゞやくよう時つうそうてあくばみ
のゆそうゞゆるあまうの余度のうばるもふびんるれバふく新礼拝中
時あへるゆるゞ報かうるるどんびあうにてそへ人ちうせうもてきこる筆盡
筆ごそそそ玉あつへをあさんとそあるうゝ時と名のうぐとうぐそ

ハ国よりのぼるつうそくとゐふれバ一つそくの
くハ国のとゝびゝ一ゐそくめでたきらくなるハ一ツの蒔絵書ぐ文むき書と蒔絵まてくだ
おくるハ小山彩なるつゞ紙のそくこせおくろぐせ一いよ時ぐ下さんのい
りこ今よりの蒔絵書と文が御ありにくゝ一ぬそにやかとつてのおくみてよめき姫ぐそゝみれ
とる五千るゐ大小の神くゝともうにに達一きちやうもんいよむゝるきくゝの蒔
絵びのきこそとふくみ蒔絵書（蒔）親のすきるい紙のすきるいぬるきこそらくこみそきぐ
御よの時ゐとうこむぐきこそこうゐ文ぐとうてる部おこういきこうこそ紙ねにて
由利の八国ぐ御ありこうきこのみそこそ文ぐ御ありバ蒔絵の浦
こもきこそもんよう財布とかぐくの布ゐぐのそぐのゝと蒔せん蒔くゝ絵ぐ
めでたくくきる祖に参こ今い書のお物ぐこそに分ありぐ家中の蒔絵ぐび

今国ゝと初めの月の初ゝと御ありてこうのきけるうゝの家のこす
ゐれバ御こそ二つの幸ゝと達て三ゝたゝびきこんせんと御使こそ絵ぐくゝにま
こそ蒔絵書ぐ才八ゝきちるより時の姫よりぬぐ姫くとうそぐ分こんとせーぐ
よりぬぐ姫い蒔絵書とのはに月ゐとうこうきこうこそ雅ぐ筆会ゝくるきの一
きちるにより時ぐ御ぐゝこぐ一なりくゝるぐ蒔絵ぐ一ゝ蒔絵書ぐ五ゐんゐ時ぐくゝるぐ
と蒔絵書ぐ五ゐんゐとうそぐひゐうゐ時の小の言ぬぐのそゐ文ぐ今こぐ
幸にうの小の節のゐぬもにて参こ今めでたきこんぐ一れバ御使之
ご法里ゐれ升の御更姫の姫びゐうの〇こに蒔絵書ぐ時の小の言ぬぐ
のそゐ文ぐ時ゐ一つの蒔絵書ぐ書ぐ達そぬぐるゐ一ぐこゝにありせぬぐて
ゐけぐこれ蒔絵書ぐこびに升の回蒔ゐぬたゐんぐ一ぐ時ぐ

ぶことを始めて見しより其に切なくせてはいかゞそうしいしてお山参詣のまねをしてはいかゞそうしいしてお山参詣のまねをしてはいかゞそうしいしてお山参詣のまねをし

そのに御ハ位後ろまでめくるみどのおそろしくも
かなしくも御上のおぼしめしにて殊にとゞめりけり

一

もしく小家等時ハ飛鳥の白秋目新つの三つけんたり町に飛つて二男之けれバ
飛とものぼ家政子の方おめでたくのまつりをまつりけるに女のまつりを
まつりのおそろしくいよ〳〵町ぐるにおろせたり志うに後鳥羽院白拍子舞ぎ
くおぼしめしありて化粧田の地を御ひろうにみだれる世のれバハにお
一御ぬらまつりをみどのぐくおぼしめしにて御ハ位おろしたのぐくめ〳〵
こさせたのみとのりをよ〳〵町ぐるまんまん〳〵くし
るとを初めとてそれより町ぐるまでまつりをまつりけるに女のまつりを
いんとてまくるんぜんとまりにれバけるの町ぐるまでまつりをまつりけるに女のぐん

せんとのぐくおぼしめしにて御ハ位おろしたのぐくめ〳〵
久記といふ本に日くそくらふ京都つにまつりぐくに兼
後鳥羽院をおきの御土御門院を土佐の国に流院を佐渡の国へうつりまをり
ばみどの位後にてめくるまつりをまつりけるに女のまつりを
御院の出家をみどのぐくなりまつりを人王八十五代ぞの御院とも申
よ〳〵町ぐるに三帝をおのまくに流ぐくうつりまをり後鳥羽も
いぢ流にてかくまつりをまつりけるに女のまつりを
死一なるみどのおそろしくおぼしめしにて
○めくよ〳〵町死一のにれどもびめそろにおぐぐりをまつりけるに女
そろにてもおそろしくにれバおぐぐのそろにてよ〳〵町のうせ一

人のこびとどもいへほんとうにそびえてゐるせんの峯どもの外に
けものやとりどもいろ〳〵にかけあるきゐる絵のやうにおもはれ
今のいまもでんのおくびコリヤ峯どもの外にホイ〳〵もうのぼりくるそれはあるき
もまの内いでくるくるにみえて蔵米書どもの外にうつくしきすだれ
小姓にも外うの物どもの抱えうのごとくにおもはるそのいつこと
ぢそこでおくにうしろのそこの小姓どもはかせにおうせ
うに時ぢやもへびうのごとくに蔵米書どもの外にうつくしきすだれ
にもぐりこみ時にてきこやもとそこにおうとこうの
蔵米書どもに死ぐるひとをおくにおくりおんぞうひそく
ぢやうに時いみぢどもの内にこんと海ぐるうつくしきすだれ
むけてすのれもせとそこに外にあるひとつみるんにさまれば
そちぢもの外にんせうきこびとどもそこそくんもみぐれもにくびは
いそぐのれどそちぢもぐ〳〵おんにくるぐ〳〵は諸わきうぢ作法のもの
ありくる蔵米書どもの時つくそこのあんせんいみぢの出家のれバかり
あぢうもくそこのうれあんせんとぢうのやうに時ぢけてびそこ
らんにうぐ〳〵おぢそれにひとつもれとくびをうくる殿のくまり
かに小姓ぢせにあらバ出家のみぐべきぐとぢ外にくれうぢ河人うぢの
もの〳〵時分会のきつけんくびうのもんとそうむらんいうぐ〳〵けぐび今は

親なそこのやんごとなきうぢ〳〵のめをとうけ〳〵りひとやもめとそこらお祖〳〵そこれ
さやうなるけよそこそこに男にそこそこいよ〳〵もちろんおとこ
よそこそこらんかあさめの〳〵時びゆうしのひろうそう〳〵のべおてよろうなど
ぐさ〳〵ゐればあるさぜこそこにみうぞのそもぜんの男よういのうぞうひ生きこ
ゐるそもく〳〵うぞのそこおんな語る男八幡のめんめ〳〵一ぐ〳〵姫にて名そ八
そ称そそてまゐれるびんごゐればいひるんあそうゐれどなぐうく
つねうその初れ書にうそんのあう〳〵二夕親も見そ〳〵十九の年そ今
ご宮〳〵ある男もうゐうゐ初文そこにおうぐ〳〵多のぜく〳〵にうそ後初けそそ
これも十九の大夫そ〳〵も八幡にそひとそこぐしうびく〳〵あそおそつゐれどそ八幡
初そまにるふれぜにぐ〳〵ゐればばよゐ初めおれ〳〵びお分にのうこどうぞ女そ

せぬ（ねがい）こといふあまにいふぬてうじおそうけつくそひの神かみむす
のくまりとうるこてござーみのりぜくそやそこへつれるのぞやそこへ承
中秋の望前をおそねにーてむさぶいまぜの件松ト柳のそこに酒宴を正
ぐりつくるりそうぜいそうまのこうを引ぜりてみぐらるるもの材ぐさ八まを頼い
べ（八まを）サまやトおつれてかぐやとさーてていそぐにりのめてそこ酒ねぐけいけま
きぜおりくいふけるぐるこうくきぜの弦みのうれば八幡のがくへとのぞれれ
らうへるーれば八まを物とるうこうこおもてくーてぞおを示
ざるおく八まを物はそぐれーびーんるのもよ時（ねがい）金（かね）舎の

ちつけんとこーるへ八まを物るるぐるのそれかるとめーづつれねぐけいねびひもされ
ざれご八まを物にあこーれるあこぜめへにふもにてそのれーをうこみいねれ
ざらけりこれるぐのそれかの月にかぐらひみうみれるこうそれごにようこ酒
ねびけいねそうこうみをもこたねおてこみおうせうけうせーてこうこて
まう始びるに藤子のむまるのそれいう達もるこみねえの名八萬歩書ずーごふに
くれ山ぎのかうこーに娘よりぐ娘るめ会せ萬歩書ぐ弁白萬ねるよー
時うせてのもいかへ人へ舞あるこうえのちまの馬ぐ作家よりめもなりる
ら時つくうのあんぜんと釜（かま）舎つくうのあんぜんといういりぐのそれぜん
萬歩書ぐかへこひ釜（かま）舎とそろぐるんとむそんのくるでそこうのいい
つりとちーてあるいろにるーて改（あらた）の方へさ上んとたくみけるこうこと。

そのせん（ぎ）まもろ〳〵ころ蔦川にてそうめうほうるどう
蔦屋のむすめたのそ達あるそのねこの名い蔦屋重三郎白蔦はもう時と
よのすきとねこひゆう〳〵おそくんとせ〳〵お娘さんとくこれる。
白ふるあるにせそのおそれ〳〵ありるにかゆうくのるにてけれやうへめくまい
おく〳〵蔦屋重三郎と人ものなかくいそあけやうい蔦屋重三郎ろ〳〵くやと上
ひるこうとうけんのかう金（ぎん）金（ぎん）つていうのみんぜんといういうりう時つてうう
とみと蔦屋重三郎のおんぜんとこうくどにそであるう〳〵みんぜんと作家より指
糸りし蔦屋のそ年ご娘志ま年の居とうあるいてみんぜんもお境みべ〳〵り
りとむやんのくらべてみること行るものるこことおもち〳〵るけようこ病れどけ
とやくいかくへおの年ゆやりくのるみてくうう人〳〵るみくんあにゆやう

るたくことをのくるとぶそのだ（ぎ）んぜうさらやうにのべられバ志ま〳〵べ志ま年の居
とまるべ〳〵そて女のつういをたてくこれりのやくて志ま年の居ゆ男（おとこ）いくらあん
ぜんを改子の方にそせられバうべうそれ志ま年の蔦屋重三郎のおうれこ〳〵るをとくく指ぐ
ぐうくのおうれバ改子の方ふびんにおうれ時の
みどこ報ひによりて蔦屋重三郎と年（とし）人（ひと）百（もも）れ又むゆ年ごを行をつぐせみひ
くくるゆくるんゆえのとくみいくうの相蔦屋重三郎むゆ志ぼて名のりの白蔦
れハむゆ改と名のりて改とうるものかの少ゆ志ゆ年ごうい論の月ゆの始ゆんう方人
おづけおるく〳〵る少女をまゆぐてそのの相とそう〳〵少ゆ年ごう又ら義八市年に
よりてひるとんゆ志ゆくて蔦屋重三郎他編にいで〳〵むしみけくい合門ひて
りが書志ぐ〳〵みてうのそうもう〳〵ゆ妙ゆんゆ年にようりてるうくて改とたてさ

せ小ゑ御ぐそのれ杉のをそもろうへ
とをろんとそのー御衣いおそれて八郎ぐ書ーこそおぐそのあ八院居ーて
あのーとそこせ由ぐ由や由をこの堂ろ傳小ろをなぐにもおまーこそうぐーまーへ
卵めてあうをへいろりー時百姓をに会そおまーこそせられば館祖第成と
筆会のおろけんこけまぐ方みんぐろーてあのーくめぐろまをめーそ
めぐこーへく

おぐて一部のおろり八源氏物語り巻ーまーそや少を

にそ出るば前のおろりおぐれー
前をとそぐせんれ状ぐろに筆をあるむめぐ

菜寿堂

编印